平成 21 年度

佐和山城遺跡
現地説明会資料

―滋賀県彦根市佐和山町―

平成 22 年 3 月 20 日（土）

文字が線刻された硯

「本町筋」西側区画の素掘りの井戸 2

調査主体　滋　賀　県　教　育　委　員　会

調査機関　財団法人滋賀県文化財保護協会

１．佐和山城遺跡の概要

(1) 佐和山城の位置と歴史

佐和山は標高約 233mの独立丘陵です。当地は北側に入江内湖、西側に松原内湖をひかえ、さらにその西側には琵琶湖がひろがっています。そして、東側には下街道（江戸時代の朝鮮人街道）と中世東山道（江戸時代の中山道）が通過し、北側には朝妻湊、西側には松原湊を控えた水陸交通の要衝でした。また、犬上郡と坂田郡の郡境にあたり、近江南北（江南、江北）の境目にあたります。

城の築造時期は、鎌倉時代初めに佐々木氏の一族佐保氏が館を構えたのが始まりと伝えられます。その後、佐々木氏は六角氏と京極氏に別れて対立、戦国時代には近江の覇権をめぐって六角氏と浅井氏が戦うなかで、佐和山城には六角氏家臣小川氏が城主として入り、この地域を軍事的拠点に位置付け、境目の城として争奪戦を繰り広げました。

元亀元年(1570)当時、浅井氏家臣磯野員昌が城主をつとめていましたが、織田信長がこれを攻めて、元亀 2 年からはその家臣丹羽長秀が城主となりました。また、豊臣政権においても佐和山城は地域支配の拠点としての役割を担い、堀秀政や堀尾吉晴が城主となっています。特に、秀吉の重臣石田三成が城主になると、領内から夫役を徴発して修築し、その長い歴史のなかで最大規模の城になったと言われています。

慶長 5 年(1600)の関ヶ原合戦で三成が敗れると、佐和山城は 3 日後に落城し、徳川家康の命により井伊直政が新しく城主になります。そして、直政没後の慶長 9 年から彦根山に彦根城の築城がはじまると佐和山城は廃城を迎えました。

(2) 佐和山城の構造

江戸時代後期に描かれた『佐和山城絵図』や現存する遺構から城の構造を考えると、佐和山城は山頂の本丸を中心として各尾根上に法華丸・太鼓丸・二の丸・三の丸・西の丸を配し、各所に土塁や尾根を断ち切る堀切（ほりきり）を設けていることがわかります。石垣は石田三成段階に構築されたと考えられますが、彦根築城の際にほとんどの石材を持ち去ったとされ、本丸・二の丸・太鼓丸の一部にしか残っておらず、全体像はよくわかっていません。現在、山下には東側の中山道に面して大手土塁が残り、その中央の虎口(こぐち)に大手門があったと推定されます。

(3) 調査の経緯

平成 21 年 4 月から 9 月にかけては、「奥ノ谷」と呼ばれる地区を発掘調査しました（対象面積 2,281 ㎡）。この地区では現況において、谷口部を閉塞する土塁の痕跡（畦や畑等）や、内堀の痕跡（河川）が確認できます。そして発掘調査では、屋敷地を囲む溝や堀が見つかったほか、石組遺構や橋状遺構、門柱跡などを検出しました。『佐和山城絵図』に「侍屋敷」と記されたとおり、ここには 16 世紀後半代の武家屋敷地が営まれたことがわかりました。

今回の発掘調査は、前回調査地の東側において今年 2 月から再開しました。調査対象地はほ場整備事業における排水路計画箇所 548 ㎡で、『佐和山城絵図』に描かれた内堀と、当時の主要な道路「本町筋」に挟まれた城下町（町屋地区）推定地の一角にあたります。

２．発掘調査の成果

発掘調査対象地は北側の第 1 調査区(幅 4m、長さ 35m)と南側の第 2 調査区(幅 4m、長さ 102 m)です。発掘調査は現在も継続中ですが、『佐和山城絵図』等から推測されていた城下町（町屋地区）の範囲において、道や溝・井戸などの遺構を発見しました。また、さきに見つかった武家屋敷地区（奥の谷地区）との境界においては、土塁の東側で内堀の痕跡を確認することができました。これまでに確認された主な遺構・遺物は以下のとおりです。

(1) 主な遺構

①内堀跡（第 2 調査区）

第 2 調査区の西部で落ち込みが見つかりました。西に向かって緩やかに傾斜して平坦面を形成し、西端部はさらに一段落ち込みます。内堀の東側部分と考えられます。見つかった部分は東西方向の幅約 10m分ですが、内堀西側の現存する土塁までの距離から、幅約 22mを測る大規模な堀だったと推定できます。堀底までの深さは約 0.5mしか残っていませんが、現在の土塁頂部からみた深さは約 2mあります。土塁はすでに大きく削り取られていることをふまえると、当時は高い土塁と深く幅広い内堀によって城内外を隔て、防御していたとみられます。

②道と溝（第 1 調査区）

全貌は不明ですが、鳥居本からのびる現道の南側で現道と並行するほぼ東西方向に流れる溝を検出しました。短期間に改修されており、新古二時期に分かれます。古段階は幅 3m以上、深さ約 1m（最深箇所）で、溝底の北側をさらに深く溝状に 0.3m程度掘り下げていたほか、直径約 0.8mの井戸も掘られ、その中からは鍛冶に用いるフイゴの羽口(はぐち)も見つかりました。新段階では、古段階の溝が土砂で深さ 0.4m程度埋まったのち、埋まった粘土を部分的に掘り出して新たに砂利と混ぜあわせ、これを舗装材として硬く突き固めて道とし、南側には深さ約 0.2mの側溝を設けています。

③「百々町(どどまち)」を通る道（第 2 調査区）

小字「百々町」を通る現況のあぜ道は、城下町時代には主要道であったとする研究があります。今回、このあぜ道の下層から、道状の高まりが見つかりました。

④溝（第 2 調査区）

第 1 調査区でみつかった溝や道と同様に東西方向に流れ、西端部で内堀に流れ込みます。最大幅約 2.0m、最も深い箇所で深さ約 0.3mを測ります。町屋を区画するとともに、生活排水などを流す目的で掘られたものです。「百々町」を通る道と交差する部分では、人頭大の石を東西方向に並べた石列が見つかっていて、道の下を水が流れる暗渠(あんきょ)と考えられます。鋳物に使われる「とりべ」がこの溝の一箇所で固まって出土しています。

⑤井戸（第 2 調査区）

「本町筋」西側の区画で素掘りの井戸 2 基が見つかりました。東側の井戸 1 は直径約 1.6m、深さ約 1.7mで、深くなるほど直径を狭めつつ、粘土層下の砂礫層まで掘り込まれています。西側の井戸 2 は楕円形（長軸約 2.0m、短軸約 1.5m）の平面形状で、砂礫層に至るまで深さ 2.3m以上、垂直に掘り込まれているとみられます。井戸 2 の北東には掘立柱建物の柱穴が多数ありましたが、建物の規模や構成は不明です。

⑥その他

調査対象地の遺構密度は全体にあまり高くありません。これは、佐和山城が廃城された江戸時代以降、水田を作る際に城下町当時の生活面がかなり削り取られてしまったため、井戸などの深く掘り込まれた遺構しか遺存していない状況を示しているとみられます。

(2) 主な遺物

第 1 調査区の溝や第 2 調査区の内堀や溝・井戸などの各遺構から、様々な遺物が出土しました。これらは、いずれも 16 世紀第 4 四半期に相当することから遺構も同時期と考えられます。

①土器類

調査区全体において出土しています。信楽焼の擂鉢、瀬戸美濃焼の天目碗・擂鉢・皿、常滑焼の甕、志野焼の碗、備前焼の擂鉢のほか、中国大陸から輸入された磁器(青磁・青花)の碗・皿などがあります。特に瀬戸美濃焼の天目茶碗や輸入磁器が目立ちます。

②金属製品

銅銭(磨滅していて種類は不明)のほか、鉄滓や大型のフイゴの羽口、とりべといった鍛冶・鋳物に関連する遺物が第 1 調査区の溝内の井戸や第 2 調査区の区画溝などから多数出土しています。

これらのことから見て、城下町（町屋地区）には鍛冶職人や鋳物職人が居住する地区があったと考えられます。また、用途不明の鉄製品も第 2 調査区の区画溝にとりつく溝から出土しています。

③木製品

板状の木片 2 点が、第 1 調査区の溝から出土しているほか、用途不明の加工木片も第 2 調査区の井戸 1 から見つかっています。水が湧きやすい土質のため、保存状態は良好でした。

④石製品

砥石や石臼・茶臼が第 2 調査区の区画溝などからみつかっているほか、五輪塔の部材（笠部）も井戸 1 から出土しました。また、第 2 調査区の井戸 2 からは硯 2 点が出土し、そのうちの 1 点には裏面に文字が線刻されていました。線刻文字は 2 行あり、不鮮明ながらも部分的には「内（町□□□太□）」「〆（□長もしくは墨）拾八文 佐門」と読めそうです。

⑤その他

調査区全体において、約 20 点の瓦が見つかっています。このうち、文様のある軒丸瓦・軒平瓦は 3 点で、他は丸瓦と平瓦でした。第 2 調査区の井戸の下部からは、丸瓦・平瓦（コビキ B 手法）約 10 点がまとまって出土しています。また、壁土と思われる焼けた土の塊も第 2 調査区の「本町筋」近くに位置する土坑から見つかっています。

３．調査成果からわかる佐和山城の城下町の様子

佐和山城は、石田三成の居城として全国的にもよく知られています。今回の発掘調査は、ほ場整備工事にかかる排水路計画箇所を対象とした小規模なものですが、『佐和山城絵図』等から推測された内堀や城下町（町屋地区）の様子がはじめて明らかになりました。

まず、内堀については、『佐和山城絵図』（図 4）や空中写真（図 5）などから、その存在を推測するしかありませんでした。今回、部分的にではありますが、内堀そのものの存在が確認できたことから、武家屋敷地区（奥の谷地区）の東側は土塁と内堀によって防御されるという構造が発掘調査から明らかになりました。

つぎに、内堀の東側には、城下町（町屋地区）が広がっている様子も確認できました。見つかった溝は『佐和山城絵図』に描かれていないもので、短期間に改修され道路として機能していた時期もあったことがわかりました。また、柱穴や土坑、2 基の井戸などが見つかったことは、この地が生活の場であり、町屋が広がっていたことを示しています。加えて、鍛冶関連遺物が目立って多く出土することからは、ここに鍛冶職人も居住していたことがうかがえます。

以上のように、今回の発掘調査は、これまで実態がよくわかっていなかった佐和山城下町の景観を今後復元していく上で、きわめて貴重な資料をもたらしたと言えます。

発掘調査が円滑に進められ、こうした重要な成果が得られたことは、ひとえに地元の皆様や関係者の方々のご理解、ご協力の賜と感謝いたしております。厚くお礼申し上げます。

《用語の解説》

佐和山城絵図(さわやまじょうえず)　井伊家伝来の佐和山城絵図 3 枚が彦根城博物館に所蔵されています。内 1 枚には文政 11 年(1828)の墨書があります。

コビキ B 手法　瓦は粘土塊から切り取られた粘土板からつくられます。鎌倉時代以来、その切断にはより糸が使われ、これで切断する時は力の加減で粘土板に付く糸の痕跡が斜めになります。考古学では、これをコビキ A 手法と呼んでいます。豊臣秀吉が大坂城を築城するに当たり朝鮮半島の技術を学び、糸から鉄線の両側に棒が付いた H 状工具に技術革新させました。これで切断された粘土板には平行な鉄線の痕跡が残ります。これをコビキ B 手法といいます。近畿ではコビキ A からコビキ B に変化するのが、天正 11 年～天正 15 年以降といわれています。この技術を確認することにより、瓦が信長段階以前か、秀吉段階以降かが判断できます。

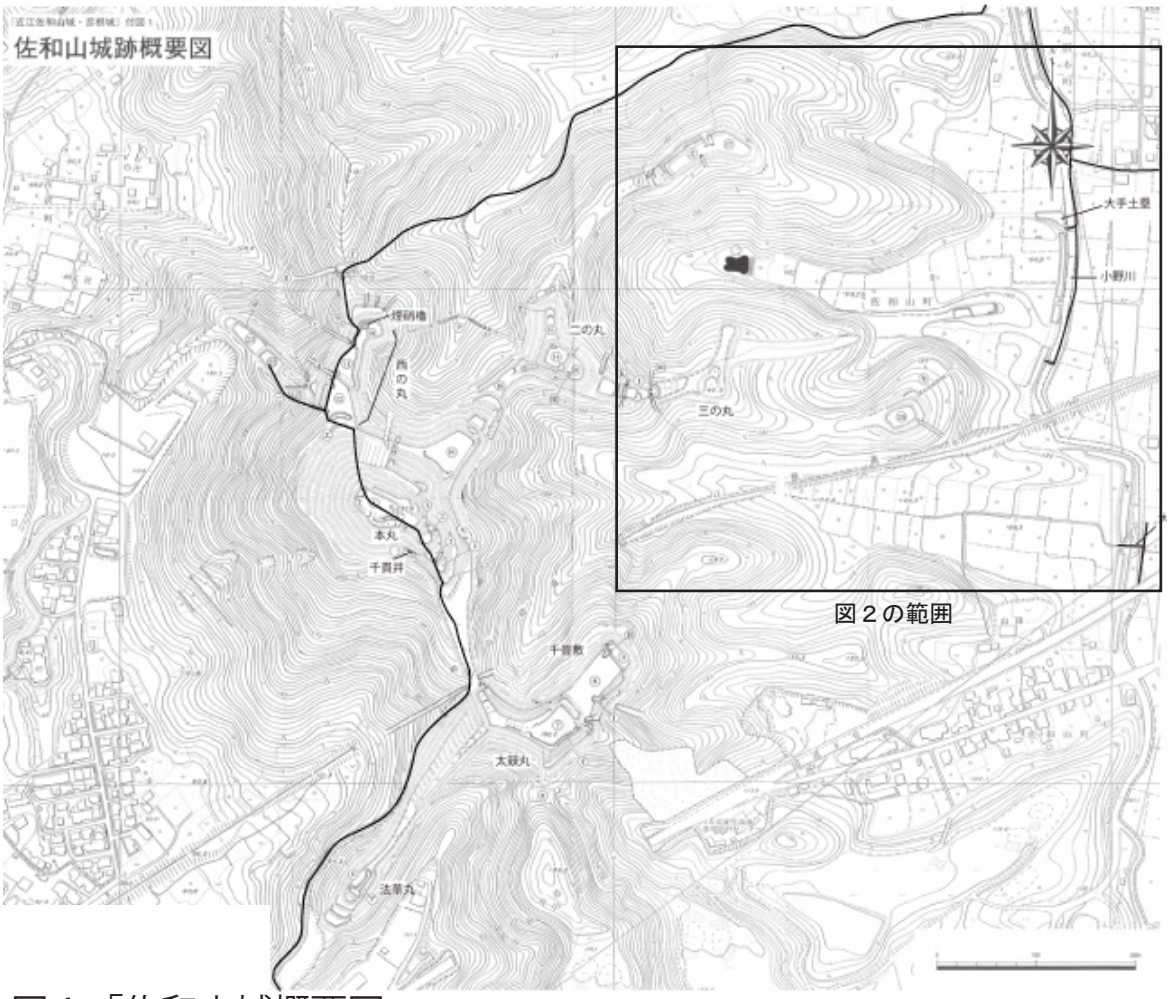

図１「佐和山城概要図」(中井均氏作成､『近江佐和山城・彦根城』サンライズ出版 2007 より)

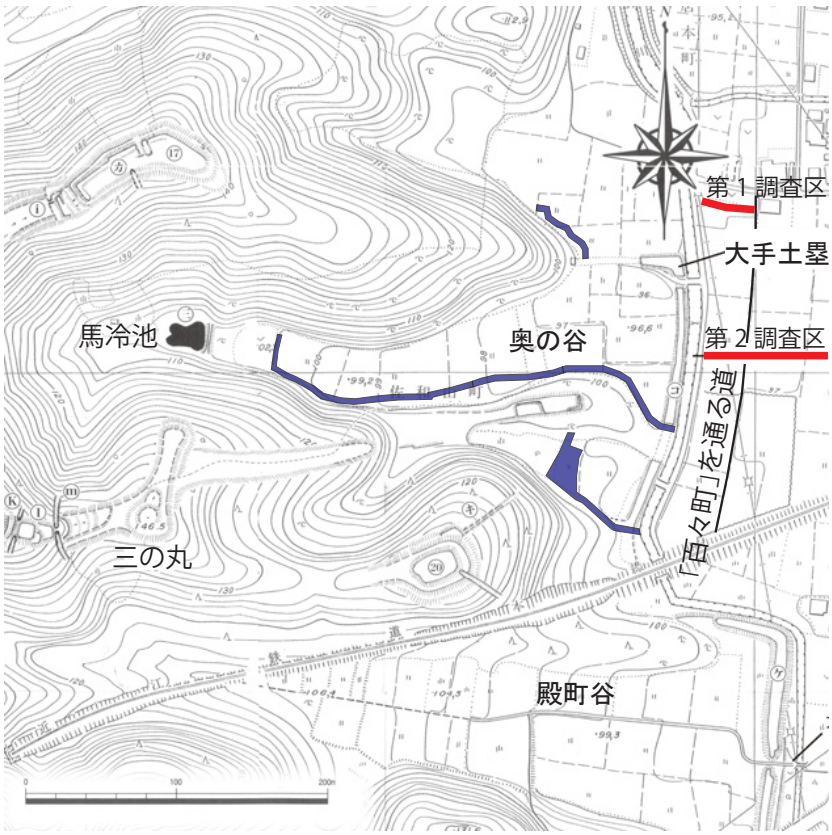

図２ 発掘調査地位置図

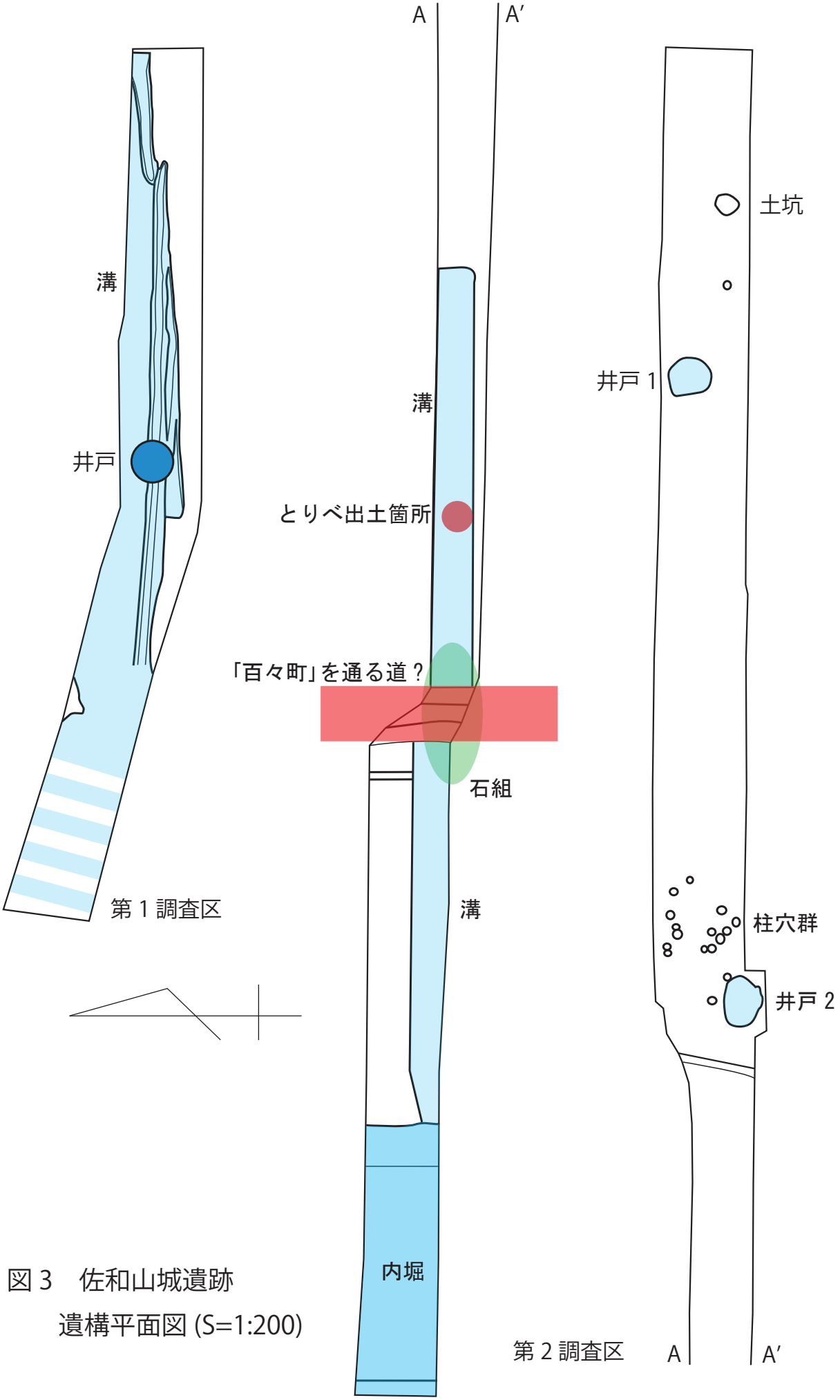

図 3　佐和山城遺跡
遺構平面図 (S=1:200)

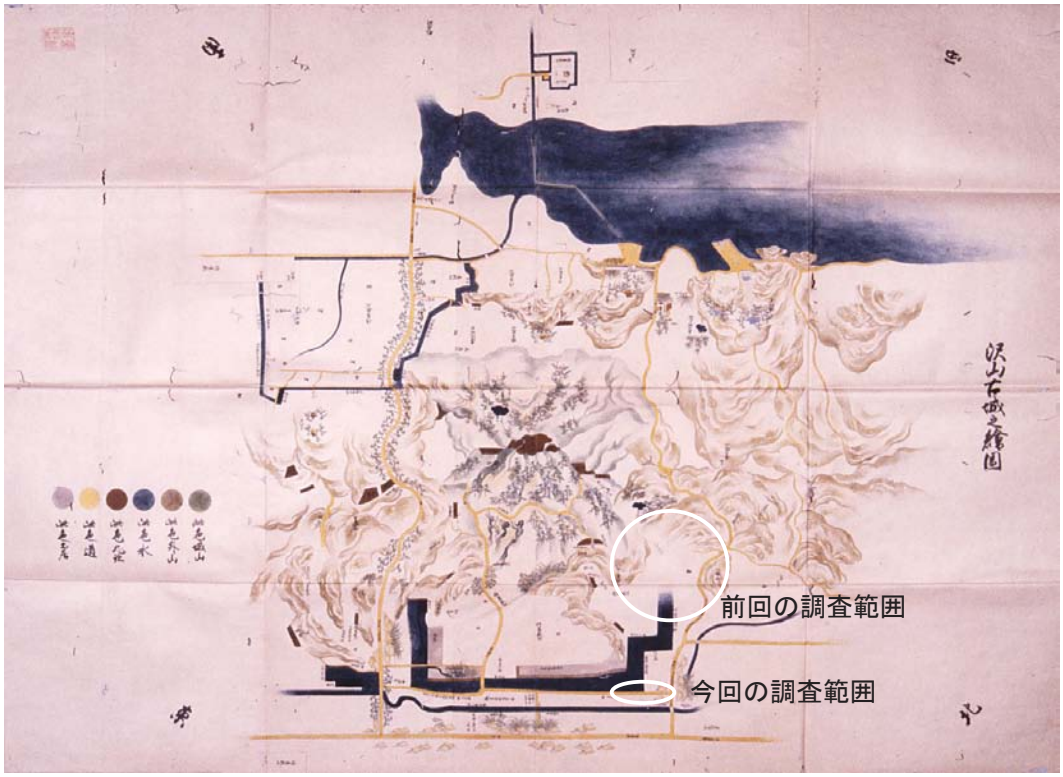

図 4『佐和山城絵図』　（井伊家文書、彦根城博物館蔵）

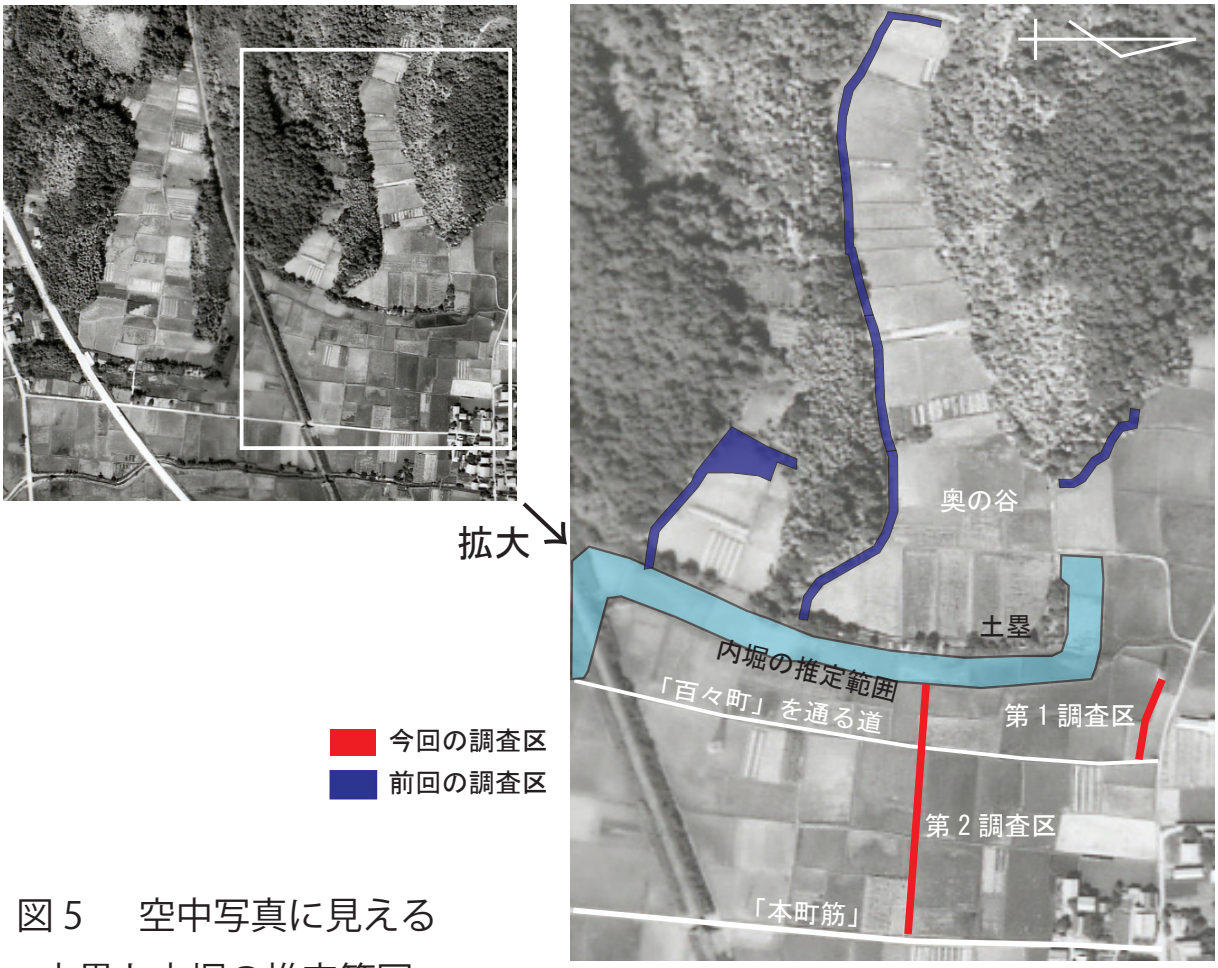

図 5　空中写真に見える
土塁と内堀の推定範囲

国土地理院空中写真「MKK615-C9-9082」(1961 年撮影) より作成

第１調査区　溝・道

第２調査区東部

「百々町」を通る道